



Title	「高齢社会イメージ」の意識構造とその世代差 : 2001年度「情報化社会に関する全国調査(JIS)」データを用いて
Author(s)	岩渕, 亜希子; 直井, 優
Citation	年報人間科学. 2003, 24-2, p. 155-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「高齢社会イメージ」の意識構造とその世代差

——2001年度「情報化社会に関する全国調査 (IIS)」データを用いて——

岩渕亜希子・直井優

〈要旨〉

本稿は、高齢社会というわが国の現状と高齢化の今後の社会的影響について、人々がどのような意識を抱いているかという「高齢社会イメージ (aged society images)」を、世代差という観点から明らかにすることを目的としている。これまでの研究では、限られた年齢集団を対象とした調査が多く、世代差を検討する資料としては不十分であった。また、老人観や高齢社会についての知識を扱う研究は多いが、人々の認識を高齢化という社会変動との関連において問うという視点を欠いていた。したがって本稿では、2001年度「情報化社会に関する全国調査 (IIS)」から得られた20～89歳までのデータを用いて「高齢社会イメージ」の世代間比較を行なった。

分析の結果、次の知見が得られた。第一に、60歳以上世代でもっともマイナス・イメージが強く、プラス・イメージは20～30歳代世代、40～50歳代世代でより強い。第二に、40～50歳代世代では、あるマイナス・イメージを強く持っている人は他のマイナス・イメージも強い、つまり悲観的な人と楽観的な人との分化が顕著であるという特徴がみられた。これは、40

～50歳代世代が「団塊の世代」を含む人口集団であり、なおかつ高齢化という社会変動の影響のもとケアや介護をめぐる世代間関係のちょうど過渡期世代にあたるという世代の特徴がもたらした、社会観の二極分化であると解釈された。

キーワード

高齢社会イメージ、社会観、世代差、意識構造、
情報化社会に関する全国調査 (IIS)

1 はじめに

わが国は1985（平成7）年に「高齢社会（aged society）」時代をむかえたが（総務庁統計局2000:21）、いわゆる「団塊の世代」の高齢化をひかえて、高齢化という社会動向は依然として続いている。国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計（中位推計）によれば、2050（平成62）年には、高齢者人口割合は35.7%の水準にまで達するとされている（国立社会保障・人口問題研究所2002:3）。本稿は、この高齢社会というわが国の現状と、高齢化の今後の社会的影響について、人々がどのような意識を抱いているかという「高齢社会イメージ（aged society images）」を、世代差という観点から明らかにすることを目的としている。

本稿がとりあげる「高齢社会イメージ」は、高齢者役割についての意識や、高齢化時代の社会的諸制度・価値観などについての意識から構成されるが、これは人々が社会をどのようにみているかを表わす社会観の一形態といえる。社会観を知ることが重要であるのは、それが人々の行動や意識の1つの源泉となるからである。たとえば、学歴社会であるという社会観が、高学歴取得にむけた行動をうながしたり、学歴にまつわる不公平感などをたらしうるのがその一例である¹⁾。同様にして「高齢社会イメージ」の場合には、人々の老後生活への対処行動や、社会保障制度についての意識、社会制度や政府・他者への信頼感、将来の生活に対する不安感、中高年齢者の

自己意識や適応などへの影響が考えられるだろう。

さらに、高齢社会時代とは、高齢者割合の増大と若年人口の減少の同時進行、および高齢期と成人期親子関係の長期化によって、公的な社会保障制度から私的な親子関係にいたるまで、世代間関係が問い直され再編される時代である。高齢社会をめぐる意識が世代間でどのように異なるかを理解することは、高齢社会時代の世代間関係を理解することにもつながる、重要な論点であるといえる。

しかしながら、これまで多くの調査研究が蓄積されてはいるものの、世代差を視野にいれて高齢社会をめぐる意識を検討しようとする立場に立つとき、大きく分けて2つの困難があると考ええる。第一に、先行研究において、老人観や高齢社会についての知識、老いの意識などを対象とした調査研究には、限られた年齢集団を対象としたものが多く（たとえば特定の学校の児童・学生やその親、老人大学の受講高齢者など）、対象者の年齢幅およびそこからランダム・サンプリングの点で難点がある。したがって、世代差・年齢差を検討する資料として十分とはいえない。第二に、いずれの研究もイメージや意識のきわめて静的な側面を対象としており、現代社会の特徴としての高齢化に対する人々の意識をとらえるという視点に立ったものは非常に限られている（たとえば、政府による世論調査の一部など）。したがって、社会観としての「高齢社会イメージ」の分析は、いまなお未知の領域として残されている。

以上の問題意識のもと、本稿では、年齢層の広い大規模サンプルを対象とした調査データを使用して、新たに作成した「高齢社会イ

メージ」指標による測定を行ない、現代社会に特有の社会観としての「高齢社会イメージ」について、世代ごとの特徴を分析する。最終的には、高齢社会の主要トピックかつ政策課題の1つである、社会保障・社会福祉システムについての人々の態度や行動、中高年の自己イメージを説明する媒介変数として有効性のある、高齢社会イメージ項目群を作成することをめざしており、本稿はその予備的分析の一貫として位置づけられる。以下、2節では、測定方法と「高齢社会イメージ」の世代差に関してレビューを行ない、3節では、データの概要と分析に用いる主な変数を説明する。続く4節では、まず世代ごとの「高齢社会イメージ」の特徴を明らかにし、つぎに主成分分析によって「高齢社会イメージ」の意識構造を比較する。5節で得られた結果について考察をくわえ、6節でまとめとする。

2 先行研究

2・1 測定法の問題

高齢社会にかかわるイメージの測定で、重要な研究課題としてとりあげられてきたものに、老人観・老人イメージがある（以下、老人観と呼ぶ）。老人観の測定が重要とされた理由は、第一に老人観がその社会で老人がおかれている状況を反映すると考えられたこと、第二に老人観が老人自身の自己概念や適応に大きな影響力を及ぼすと考えられたこと、第三に特に専門職の老人観は老人へのサービスの質を左右すると考えられたこと、第四に人々の老人観を理解する

ことが、人々の老人への行動の理解と予測を可能にすると考えられたこと、などにあった（古谷野亘ほか 1997、保坂久美子・袖井孝子 1986など）。ただし、老人観といった場合にそれが何を意味するかについては必ずしも厳密な定義はなく、それらの測定法についても標準的なものがあるわけではない。

そのような研究状況にあつて、SD法（semantic differential methodないし technique）と呼ばれる測定法が老人観研究の非常に重要な一角を担ってきた。SD法とは、Osgoodらが独自の意味論をもとに完成した意味の測定法であり、複数の相反する形容詞を対にして多段階尺度をつくり、それを対象者に評定させることにより意味の性質と有意味度を測定する方法である。この方法の特徴と有用性は、人々の持つ複雑な意味空間を比較的単純な調査設計によって把握し、人々があるコンセプトに対して抱く平均像を記述することができるという点にあるとされる（岩下豊彦 1983）。この方法を用いた近年の老人観研究としては、保坂・袖井（1986, 1988）、中野いく子（1991）、古谷野ほか（1997）などがある。

しかし、今回「高齢社会イメージ」を測定するにあたって、SD法ではなく評定法を採用した。というのは、SD法が意味ないしイメージのうち、「情緒的意味（affective meaning）」という側面に焦点をあてて測定・分析するものだからである。本稿でいう「高齢社会イメージ」は、老人観研究と重なりをもつ高齢者役割についての意識を含むが、それだけではなく、高齢社会時代の社会的諸制度・価値観などについての意識を尋ねる項目も含んでいる。これを評定法

で問うという場合、具体的には、高齢社会に関する複数の記述項目をあげ、それぞれについて多段階尺度で「どの程度（気持ち）あてはまるか」を尋ねる方法をとる。つまり、ここで論者らが知りたことは、人々が高齢社会を全体としてどのような情緒的意味空間で認識しているか（たとえば、明るいものか暗いものか、厳しいものか優しいものか、といったような）ではなく、高齢社会の諸特徴のそれぞれに、どの程度の期待や不安や評価を負わせているかという点なのである³⁾。

以上の理由から、本稿とS-U法による老人観研究の間には、対象および測定法上の明確な違いがある。しかし、社会観としての「高齢社会イメージ」研究の蓄積が浅い現段階では、老人観の分析において世代差（年齢差）についてどのような知見が得られてきたのかを確認しておくことは、高齢者役割をその構成要素に含む「高齢社会イメージ」の分析にあたっても意味のあることであろう。2節の後半では、S-U法以外の測定方法を用いた研究を適宜参照しつつ、高齢社会における老人観や老いについての意識の世代差について簡単にレビューを行う。

2・2 先行研究における世代の効果

「高齢社会イメージ」の要素の1つである老人観については、2節で指摘したものも含め、内外で多くの研究蓄積がある。しかし、古谷野らによれば、とりわけわが国では児童・学生を対象とした研究が多く（馬場純子ほか 1983; 中谷陽明 1991; 中野 1991; 保坂・袖

井 1986, 1988など）、成人を対象とした研究、年齢差ないし世代差を検討するための資料は著しく不足しているのが現状であるとされる（古谷野ほか 1997: 148）。

大学生を対象に老人観を調査・分析した保坂・袖井（1986, 1988）は、イメージの規定因として重要なのは基本的属性ではなく日常の経験の内容であるという立場から分析を進めており、イメージの世代差・年齢差を検討していないが、大学生の老人観は肯定・否定の両面を含みつつも、総じてやや否定的な方に傾いていることを明らかにした。さらに50形容詞対の因子分析から6つの因子を得たが、第1因子である人格・精神面の「有能性」は比較的高い評定を得ていたものの、第2因子である身体面での「活動・自立性」はもっとも低い評定であつたこと、もっとも評定が高かつたのは第5因子である情緒的特性としての「温和性」であつたことを明らかにした。保坂・袖井らの分析にみるように、老人観がとりあげる次元によって異なつて評価されることは、多くの研究によって示されている。たとえば古谷野（1988）は、老人が「内面的な暖かさ」の次元では肯定的に評価されるが、「外見的な活発さ」の次元では否定的な評価となることを示した。

45～64歳の中高年男女を対象に老人観を測定した古谷野ら（1987）は、中高年の老人観が全体として中立的で、先行研究によつて報告されている大学生らの老人観よりも肯定的であると報告している。このことから古谷野らは、成人期以降の老人観の肯定的な方向への変化を仮説として提起した。この加齢変化仮説は、老いについての

知識や価値評価、一般的な価値志向などとともに検討を加えられるべきであるとしている。また、19形容詞対の因子分析から「力動性」「親和性」「洗練さ」という3つの因子を得、単純相関係数および偏相関係数の検討から、各因子と年齢そのものとの関連は見いだされない指摘した。

SD法による分析の結果を概括すると、次のようになる。古谷野らは、保坂・袖井の「活動・自立性」および古谷野の「外見的な活発さ」に対応する次元として「力動性」が、保坂・袖井の「温和性」「有能性」および古谷野の「内面的な暖かさ」に対応する次元が「親和性」「洗練さ」に分かれて抽出されたものと解釈している。つまり、生産性・活動性にかかわる次元と情緒的・内面的側面にかかわる次元という2つの次元がもっとも大きな区分として想定できるのであり、後者よりも前者の評定が低い傾向も一貫しているとしている。

高齢社会と関連して検討されている意識として、老人観以外にもいくつかあげることができる。その第一のものとして、高齢社会についての知識を測定する質問群であるPalmoreの「The Facts on Aging Quiz」やその改良版を用いた研究についてみておこう（堀薫夫・大谷英子1995；小田利勝1992, 1994など）^(*)。堀・大谷は高齢者と大学生を比較して、「心理的偏見」は大学生の方が強いが、「効率性・適応の偏見」では両層ともスコアが高いこと、「社会状況的側面の偏見」では大学生の誤答率が高齢者に比べてかなり高いことを明らかにした。全体としては、大学生の方でより誤答率が高かった。また、小田（1994）による「高齢化社会クイズ第3版」による分析

では、中高年層（40～60歳代）よりも青年層（20～30歳代）でより誤答率が高かった。

老人観以外の第二のものとして、堀（1996, 1998）による「老いや死への意識」調査があげられる。堀は、高齢社会における生涯教育の援助、および成人発達論を基礎づける観点から「老いや死への意識」の世代間比較分析を行なっている。一連の研究ではエイジングのプロセスを「年をとること」と「古い」の2側面に分解して尋ね、高齢者（60代以上）、中高年（40～50代）、大学生を比較して次の諸点を明らかにした。第一に「古い」への意識は、大学生よりも中高年で、中高年よりも高齢者でより肯定的であった。第二に「古い」へのポジティブな意識とネガティブな意識は別々のグループを構成していた。第三に30～50歳までの加齢変化に対する態度では、中高年は高齢者に近かったが、60～80歳までの加齢変化に対する態度では、中高年の意識はむしろ大学生に近かった。

老人観以外の第三のものとして、高齢社会そのものを対象とした意識調査について触れておこう。これらについては若淵亜希子・直井優（2003）で詳細に検討した。その中に世代差・年齢差についての記述は多くはないが、次の二点が確認できた。老後への不安感60歳代で高いが、老後の見通しは高齢者ほど明るい（経済企画庁国民生活局編1999, 2000）、マイナス・イメージは若い世代で選択率が高く、プラス・イメージでは高年代での選択率が高い（青森県総合社会教育センター2002）。年齢とイメージの関連について、結果の方向性が一貫していないが、上述の研究と同様、高年代でプラスな

いし明るいイメージが強いという傾向のあることが確認できよう⁽⁵⁾。

以上のレビューを総括するならば、以下の点を指摘できよう。第一に、老人観、高齢社会についての意識・知識のいずれにおいても、とりあげる次元により異なっており評価される傾向にある。したがって「高齢社会イメージ」においても、ある面では強い賛同を得るが、別の面では賛同を得られないといった可能性がある。第二に、大学生よりは中高年、中高年よりは高齢者において、より肯定的なイメージ、あるいはより正確な知識をもつ傾向にある。ただし第三として、中年世代の相対的位置は若年世代と高齢世代の間で一定しているわけではなく、項目の内容によっては、若年世代に近い傾向を示したり、高齢世代と近い分布を示したりということが想定される。そして第四に、因子構造として老人観を把握した場合には、肯定的な評価をうける情緒的側面と否定的な評価をうける活動性の側面とが抽出される傾向にある。以上のようなパターンが「高齢社会イメージ」においても見いだされるかが、以下の分析で注目されよう。

3 データの概要と変数

データの概要 本稿で用いるデータは、2001年に実施された「情報化社会に関する全国調査 (The Japan Survey on Information Society (JIS))」によって得られたものである(以下、「情報化調査」と呼ぶ)。本調査は全国に居住する(ただし島嶼部を除く)20歳以上89歳以下の男女500人を対象として実施された。抽出方法は層化二

段無作為抽出法、調査は委託会社の調査員による個別訪問面接調査であり、最終的な有効回答数(率)は101件(67.4%)であった⁽⁶⁾。

「高齢社会イメージ」変数 「高齢社会イメージ」の分析のために用いるのは、「情報化調査」に含まれていた問13である。問13では、「近年急速に高齢化が進んでいます、そのことについてこの中のような意見があります。あなたはこれらの意見についてどう思いますか。」というリード文、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階評定で回答をとめた。この問13は、問13 aから問13 rまでの18項目からなる⁽⁷⁾。各項目の文章は、世代ごとの回答の平均値とともに表1に示した。各項目末尾に付した(+)はその項目がプラス・イメージであることを、(-)はマイナス・イメージであることを意味している。したがってプラス・イメージ項目が10項目、マイナス・イメージ項目が8項目である。

「情報化調査」の質問項目群は、大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法講座による1993年の「高齢化社会と福祉に関する調査」(以下、福祉調査)(直井優・吉川徹編1995)を参考に作成した。18項目のうち、a、c、g、h、i、k、m、n、rの9項目が、福祉調査から得たものである。残りの9項目(b、d、e、f、j、l、o、p、q)は、「情報化調査」で追加した項目である⁽⁸⁾。本稿では、「そう思う」が5点、「そう思わない」が1点となるように配点をあてて分析を行った。したがって、各質問項目に同意する人

表1 「高齢社会イメージ」項目の一覧と平均値

項目番号	「高齢社会イメージ」項目 ¹⁾	各項目への評定の平均値と 平均値の差の検定の結果			
		60歳 以上	40-50 歳代	20-30 歳代	検定 結果
a	高齢者も住みやすい町づくりができる (+)	3.33	3.41	3.33	
b	高齢者とのふれあいが増える社会になる (+)	3.52	3.56	3.43	
c	高齢者が増えると、地域での暮らしが見直され、 人々のつながりが強くなる (+)	3.29	3.27	3.18	
d	情報技術 (IT) の進展によって、高齢者の社会参 加が促される (+)	2.96	3.10	3.02	
e	介護を助ける仕組みが充実した社会になる (+)	3.29	3.36	3.40	
f	情報技術 (IT) の進展によって、よりよい福祉サ ービスが可能になる (+)	3.18	3.34	3.37	+
g	高齢者の経験や知恵が活かされ、社会的に活躍す る高齢者が増える (+)	3.36	3.42	3.44	
h	高齢者向けの働き口が増える (+)	2.34	2.77	2.77	**
i	生きがいをもった元気な高齢者が増える (+)	3.55	3.49	3.49	
j	政治における高齢者の発言力が増す (+)	2.81	2.86	2.90	
k	若い人が転出し、高齢者だけが取り残された町が できる (-)	3.62	3.46	3.44	
l	情報技術 (IT) の進展に、高齢者が取り残されて しまう (-)	3.86	3.65	3.68	*
m	活気ある経済社会が維持できない (-)	3.36	3.22	3.15	+
n	高齢者と若い層との意識の差が大きくなる (-)	3.92	3.65	3.52	**
o	社会に敬老の精神が失われる (-)	3.43	3.13	3.02	**
p	家族の介護負担がますます重くなる (-)	4.08	4.06	3.87	*
q	老後が不安な社会になる (-)	4.02	4.09	3.95	
r	高齢者の弱みにつけこんだ犯罪が増える (-)	4.19	4.05	4.04	+

**p<.01, *p<.05, +p<.10

(注)

1) 各項目末尾の (+) はプラス・イメージ項目であることを、(-) はマイナス・イメージ項目であることを意味している。

ほど得点が高くなる。

「世代」変数 「情報化調査」データでは、20歳から89歳までの非常に幅広い年齢層を対象としているが、本稿では世代差を検討するために対象者を「60歳以上」「40～50歳代」「20～30歳代」の3群に分けた。本稿では、この3群を操作的に世代と呼ぶ⁹⁾。世代変数の構成比は、60歳以上世代が38名(32.4%)、40～50歳代世代が38名(38.0%)、20～30歳代世代が29名(29.6%)となっている。

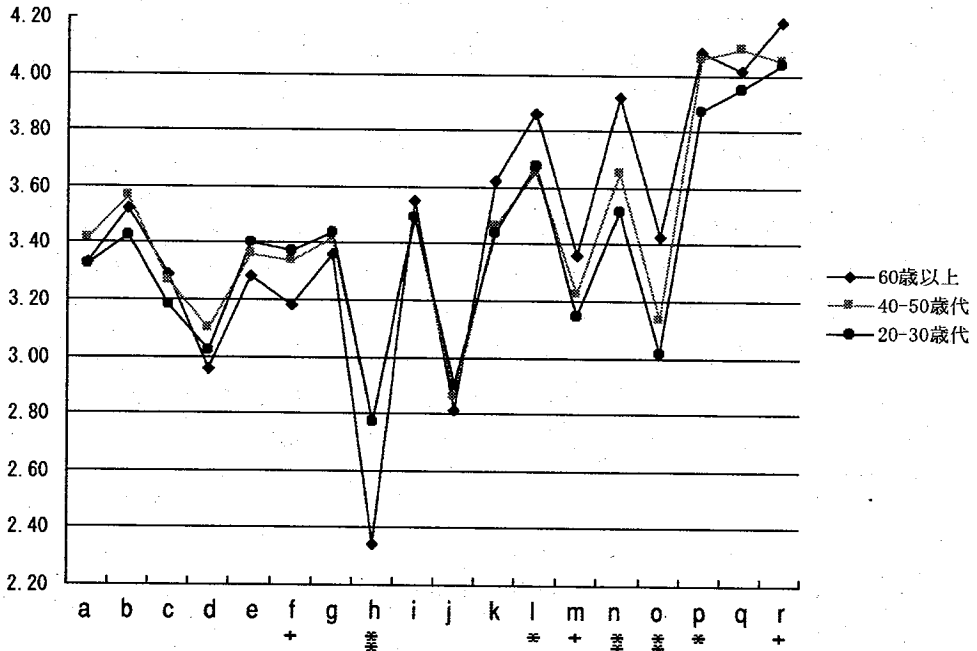
4 「高齢社会イメージ」の分析

4・1 「高齢社会イメージ」の世代差

個別項目の平均値の検討 最初に、「高齢社会イメージ」の各項目の平均値が、世代によってどの程度異なるかをみておこう。手続きとして、まず世代別に「高齢社会イメージ」各項目の平均値を求め、平均値の差の検定(一元配置の分散分析)によって、世代間に有意な差異が認められるかどうかを確認した(表1、図1)。分散分析の結果は、表1では一番右側の列に、図1では項目番号に、1%水準で有意だった場合には**を、5%水準で有意であった場合には*を、同じく10%の場合には+を、それぞれ付して表わした。

図1から、全体の傾向として次のことがわかる。第一に、総じて配点の中立点である3.0よりも高い平均値を示していることから、プ

図1 世代別・「高齢社会イメージ」の平均値



**p<.01, *p<.05, +p<.10

ラス・イメージの多くの項目においても賛意が得られているといえる。ただし第二に、マイナス・イメージの平均値がより高く、プラス・イメージよりもマイナス・イメージの方が強いと解釈できる。

次に、世代ごとの差異に注目してみると、次のことがいえる。60歳以上世代の特徴として、マイナス・イメージ項目の平均値が他の世代よりも明らかに高い。このことは分散分析によっても裏づけられている。すなわち、問13 i「[]の進展に高齢者を取り残される」 $(F(2,949) = 3.57, p < .05)$ 、問13 m「経済の活気が維持できない」 $(F(2,922) = 2.98, p < .10)$ 、問13 n「老若の意識格差が拡大」 $(F(2,963) = 11.09, p < .01)$ 、問13 o「敬老精神が失われる」 $(F(2,963) = 10.54, p < .01)$ 、問13 p「介護不安」 $(F(2,974) = 3.97, p < .05)$ 、問13 r「高齢者への犯罪が増える」 $(F(2,972) = 2.67, p < .10)$ の6項目で、60歳以上世代の回答の平均値が有意に高い。他方でプラス・イメージの平均値は、他の世代に比べてむしろ低い。分散分析で有意な差が確認された、問13 f「[]でよりよい福祉サービス」 $(F(2,922) = 2.33, p < .10)$ 、問13 h「高齢者向けの働き口が増える」 $(F(2,950) = 2.33, p < .10)$ の2項目では、とりわけこの傾向が顕著である。

40～50歳代世代の特徴としては、他の世代に比べてプラス・イメージの平均値が全般的に高く、マイナス・イメージでは全般に中程度であるが、介護不安(問13 p)・老後不安(問13 q)の2項目では60歳以上世代と同じかそれ以上に平均値が高いことが指摘できる。また、プラス・イメージの項目を詳細にみると、問13 a～問13 dの、

町づくり、高齢者とのふれあいといった、高齢社会のソフト面についての項目で、他の世代よりも平均値が高い。

20～30歳代世代では、他の世代に比べてマイナス・イメージの平均値が一貫して低いことが目立った特徴である。またプラス・イメージでは、40～50歳代世代とは逆に高齢社会のソフト面での評定は低いが、福祉・介護サービス(問13 e、13 f)にかかわる項目では評定が高く、40～50歳代世代と同程度であることも指摘できよう。

項目間相関係数の検討 次に、「高齢社会イメージ」の項目間相関について、世代ごとに確認しておきたい(表2～表4)。いずれの世代においても、プラス・イメージ諸項目間、マイナス・イメージ諸項目間で、それぞれ相関が高く、プラス・イメージ項目とマイナス・イメージ項目との間の相関は、一部で弱い相関がみられるほかは、有意な相関関係は認められない。

各世代の特徴としては、2点指摘できる。第一に、40～50歳代では、プラス・イメージ諸項目間、マイナス・イメージ諸項目間それぞれとの相関が他の世代よりも高い。プラス・イメージでは問13 aと問13 j、問13 fと問13 iの2つの組み合わせを除いて、またマイナス・イメージでは問13 mと問13 rの1つの組み合わせを除いて、項目間相関係数が0.5以上を示している。このことは、この世代では、あるプラス・イメージに賛同する者は他のプラス・イメージにも賛同する傾向にあり、またあるマイナス・イメージに賛同する者は他のマイナス・イメージにも賛同しがちであることを意味している。

表2 20～30歳代・「高齢社会イメージ」の項目間相関（ペアワイズ）

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
b	.66 **	1.00															
c	.47 **	.57 **	1.00														
d	.37 **	.34 **	.40 **	1.00													
e	.55 **	.51 **	.43 **	.36 **	1.00												
f	.46 **	.33 **	.37 **	.46 **	.61 **	1.00											
g	.42 **	.43 **	.41 **	.30 **	.44 **	.46 **	1.00										
h	.33 **	.35 **	.33 **	.25 **	.34 **	.27 **	.57 **	1.00									
i	.37 **	.41 **	.40 **	.27 **	.41 **	.29 **	.50 **	.46 **	1.00								
j	.30 **	.34 **	.35 **	.22 **	.28 **	.23 **	.35 **	.40 **	.50 **	1.00							
k	-.02	.04	-.10	-.04	.06	.00	.05	.03	-.06	-.13 *	1.00						
l	.01	.04	-.01	-.11	.08	-.05	-.04	-.08	-.01	-.08	.37 **	1.00					
m	-.12	-.16 **	-.05	-.16 **	-.07	-.10 *	-.06	-.07	-.07	-.12 *	.24 **	.24 **	1.00				
n	-.06	.01	-.07	-.11	.01	-.02	-.05	-.13 **	.02	-.15 *	.31 **	.41 **	.44 **	1.00			
o	-.12 *	-.17 **	-.15 **	-.02	-.07	-.16 **	-.08	-.12 **	-.06	-.12 *	.24 **	.27 **	.42 **	.47 **	1.00		
p	-.08	-.03	-.02	.07	.05	.05	.06	.00	.08	-.01	.20 **	.31 **	.20 **	.37 **	.27 **	1.00	
q	-.07	-.08	-.12 *	-.04	-.03	-.05	.00	-.02 **	-.05	-.19 **	.20 **	.39 **	.29 **	.36 **	.32 **	.63 **	1.00
r	.02	.03	.01	-.06	.06	-.03	.05 **	.04	.14 **	-.04	.22 **	.39 **	.17 **	.32 **	.19 **	.41 **	.41 **

**p<.01, *p<.05, +p<.10

表3 40～50歳代・「高齢社会イメージ」の項目間相関（ペアワイズ）

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
b	.69 **	1.00															
c	.55 **	.58 **	1.00														
d	.33 **	.33 **	.42 **	1.00													
e	.52 **	.53 **	.50 **	.43 **	1.00												
f	.40 **	.40 **	.42 **	.40 **	.65 **	1.00											
g	.44 **	.45 **	.46 **	.44 **	.49 **	.52 **	1.00										
h	.38 **	.35 **	.34 **	.34 **	.39 **	.39 **	.52 **	1.00									
i	.40 **	.51 **	.48 **	.40 **	.49 **	.40 **	.62 **	.51 **	1.00								
j	.29 **	.32 **	.34 **	.38 **	.35 **	.26 **	.40 **	.46 **	.47 **	1.00							
k	-.11 *	-.03	-.05	-.04	-.04	-.02	.05	-.04	-.02	-.01 *	1.00						
l	-.05	.00	-.03	-.04	.02	-.02	-.03	-.14	-.00	.02	.48 **	1.00					
m	-.10	-.06	-.05	-.02	-.06	-.13 *	-.06	-.10	-.04	-.06	.32 **	.37 **	1.00				
n	-.05	.03	-.08	-.04	-.04	-.06	.02	-.10	-.07	-.12 *	.45 **	.39 **	.49 **	1.00			
o	-.15 **	-.12 *	-.15 **	-.07	-.16 **	-.15 **	-.14 *	-.05	-.14 **	-.09	.35 **	.36 **	.42 **	.53 **	1.00		
p	-.08	.01	.02	-.02	-.11 *	-.04	.01	-.05	.01	-.05	.30 **	.36 **	.31 **	.40 **	.40 **	1.00	
q	-.11 *	-.03	-.02	-.00	-.12 *	-.01	-.02	-.16 **	-.06	-.07	.33 **	.38 **	.34 **	.47 **	.45 **	.67 **	1.00
r	.04	.11 *	.10	.11 *	-.02	.06	.13 *	.05	.06	.07	.33 **	.37 **	.27 **	.42 **	.42 **	.49 **	.55 **

**p<.01, *p<.05, +p<.10

表4 60歳以上・「高齢社会イメージ」の項目間相関（ペアワイズ）

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
b	.58 **	1.00															
c	.56 **	.64 **	1.00														
d	.36 **	.35 **	.38 **	1.00													
e	.50 **	.47 **	.51 **	.42 **	1.00												
f	.42 **	.49 **	.53 **	.53 **	.68 **	1.00											
g	.40 **	.47 **	.43 **	.44 **	.47 **	.54 **	1.00										
h	.39 **	.28 **	.27 **	.35 **	.33 **	.35 **	.49 **	1.00									
i	.26 **	.40 **	.39 **	.33 **	.40 **	.43 **	.54 **	.41 **	1.00								
j	.27 **	.21 **	.35 **	.39 **	.37 **	.33 **	.42 **	.51 **	.47 **	1.00							
k	-.02	.01	-.04	.05	-.02	-.05	.03	-.19 **	-.03	-.04	1.00						
l	-.02	.00	-.01	-.07	.07	.05	.14 *	-.13 *	.10	-.13 *	.35 **	1.00					
m	-.05	.06	-.07	.06	.01	.06	.07	-.12 *	.01	-.03	.28 **	.44 **	1.00				
n	.01	.04	.00	-.10	.01	-.03	.08	-.12	.08	-.08	.41 **	.43 **	.34 **	1.00			
o	-.08	-.09	-.17 **	-.10	-.02	-.09	.07	-.12 *	-.06	-.05	.34 **	.25 **	.27 **	.38 **	1.00		
p	-.03	.13 *	.02	-.01	.07	.08	.06	-.15 *	.10	-.07	.32 **	.29 **	.30 **	.41 **	.42 **	1.00	
q	-.09	.03	-.05	-.01	-.03	.03	.08	-.19 **	.01	-.16 **	.35 **	.34 **	.31 **	.42 **	.37 **	.71 **	1.00
r	.07	.12 *	.08	.11	.14 *	.15 *	.20 *	-.01	.16 **	-.04	.24 **	.26 **	.14 **	.31 **	.27 **	.46 **	.50 **

**p<.01, *p<.05, +p<.10

第二に、20～30歳代では、マイナス・イメージ項目のうち、問13 1「 \square 」の進展に高齢者が取り残される」と問13 p「問13 rとの相関が、他の項目との間の相関に比べて相対的に高いことがあげられる。岩淵・直井（2003）は、問13 p「問13 rが「弱者としての高齢者」の存在を前提する項目群であることを指摘したが、この3項目と他のマイナス・イメージ項目との相関関係の一部は、この「弱者性」を媒介としていると理解される。たとえば、すべての世代においてこの3項目と問13 n「敬老精神が失われる」が比較的高い相関をみせているが、このことは、「敬老精神の喪失」が高齢者の弱者としての立場を促進するかもしれないという「弱者性」を媒介にした論理によって関連づけられていると理解できるのである。同様に、20～30歳代世代が、 \square 」の進展に取り残されることも高齢者の弱者性を促進しかねないという認識をもっているとしたら、この点はいわゆる「デジタル・デバイド」に関連して注目すべき点となろう。

平均値と相関係数の分布から確認・推察できた、以上の特徴をふまえて、4.2節では「高齢社会イメージ」の意識構造の世代ごとの特徴を明らかにしていこう。

4・2 「高齢社会イメージ」の意識構造の世代差

「高齢社会イメージ」の意識構造を明らかにするため、問13の18項目を用いて主成分分析を行なった。手順として、まず全対象者に対する主成分分析を行ない、その後世代別にも同様の手続きをとつ

たところ、世代ごとに異なった因子構造が得られたため、世代別の分析結果を採用することにした。さらに、各々の世代でできるだけ単純構造に近づけるため試行をくりかえし、それぞれ回転後の因子負荷行列を得たが、最適解を得たのは問13 b、d、g、kの4項目を除いた14項目としたときであった（プラス・イメージ項目7項目、マイナス・イメージ項目7項目の計14項目）。因子軸の回転はバリマックス法によった。このときの回転後の因子負荷行列は表5～表7に示すとおりである^{10）}。

60歳以上世代では、因子数3を得た（表5）。第1因子は問13 f「 \square 」でよりよい福祉サービス」、問13 e「介護の仕組み充実」などの項目に大きな負荷を持ち、第2因子は問13 p「介護不安」、問13 q「老後不安」などの項目、第3因子は問13 m「経済の活気が維持できない」、問13 1「 \square 」に高齢者が取り残される」などの項目にそれぞれ大きな因子負荷を持った。第1因子にはプラス・イメージの7項目がすべて含まれており、第2・第3因子はそれぞれ、マイナス・イメージ項目から構成されている。以上から、第1因子は「全般的プラス・イメージ」の次元、第2因子は「社会的弱者性への不安」の次元、第3因子は「高齢社会における社会不安」の次元と解釈された。累積因子寄与率は55.5%であり、14項目の全分散の57.5%が3つの因子によって説明された。

40～50歳代世代では、因子数3を得た（表6）。第1因子は問13 q「老後不安」、問13 p「介護不安」などの項目に大きな負荷を持ち、第2因子は問13 e「介護の仕組み充実」、問13 f「 \square 」でよりよ

表5 「高齢社会イメージ」主成分分析の結果・60歳以上世代

項目番号	回転後因子負荷量		
	全般的プラス・イメージ	社会的弱者性への不安	高齢社会における社会不安
f (+)	.814	.145	-.023
e (+)	.787	.145	-.037
c (+)	.698	.180	-.237
i (+)	.678	-.075	.224
h (+)	.660	-.251	-.013
j (+)	.659	-.211	.006
a (+)	.648	.079	-.135
p (-)	.002	.813	.241
q (-)	-.072	.795	.306
r (-)	.165	.754	.136
m (-)	-.004	.106	.758
l (-)	.015	.165	.734
n (-)	-.064	.383	.667
o (-)	-.155	.391	.476
固有値	3.58	2.39	2.08
因子寄与率(%)	25.57	17.10	14.87

表6 「高齢社会イメージ」主成分分析の結果・40～50歳代世代

項目番号	回転後因子負荷量		
	全般的マイナス・イメージ	高福祉・ふれあい社会イメージ	元気高齢者イメージ
q (-)	.790	.018	-.070
p (-)	.737	-.009	-.044
n (-)	.729	-.029	-.086
r (-)	.723	.088	.150
o (-)	.709	-.262	.093
l (-)	.641	.085	-.077
m (-)	.620	-.083	-.045
e (+)	-.019	.805	.179
f (+)	-.006	.763	.091
c (+)	-.014	.739	.189
a (+)	-.059	.717	.178
j (+)	-.014	.163	.807
h (+)	-.090	.263	.762
i (+)	.038	.529	.601
固有値	3.54	2.76	1.75
因子寄与率(%)	25.25	19.71	12.53

表7 「高齢社会イメージ」主成分分析の結果・20～30歳代世代

項目番号	回転後因子負荷量			
	社会的弱者 性への不安	高福祉・ ふれあい社会 イメージ	元気高齢者 イメージ	高齢社会にお ける社会不安
q (－)	.804	-.048	-.077	.186
p (－)	.796	-.018	.090	.161
r (－)	.761	.008	.072	.077
l (－)	.569	.130	-.108	.299
f (＋)	-.009	.829	.075	-.083
e (＋)	.099	.809	.219	-.004
a (＋)	-.008	.742	.271	-.020
c (＋)	-.050	.514	.451	.013
i (＋)	.093	.222	.801	.030
j (＋)	-.105	.146	.791	-.089
h (＋)	.039	.214	.703	-.137
m (－)	.117	-.063	-.061	.766
o (－)	.179	-.092	-.027	.752
n (－)	.330	.066	-.086	.750
固有値	2.37	2.31	2.14	1.91
因子寄与率(%)	16.95	16.50	15.25	13.61

い福祉サービス」などの項目、第3因子は問13 j 「高齢者の発言力が増す」、問13 h 「高齢者向けの働き口が増す」などの項目にそれぞれ大きな因子負荷を持った。第1因子にはマイナス・イメージの7項目がすべて含まれており、第2・第3因子はそれぞれ、プラス・イメージ項目から構成されている。以上から、第1因子は「全般的マイナス・イメージ」の次元、第2因子は「高福祉・ふれあい社会イメージ」の次元、第3因子は「元気高齢者イメージ」の次元と解釈された。累積寄与率は52.6%であり、14項目の全分散の52.6%が3つの因子によって説明された。

20～30歳代世代では、60歳以上世代、40～50歳代世代とは異なり、因子数4を得た(表7)。第1因子は問13 q 「老後不安」、問13 p 「介護不安」などの項目に、第2因子は問13 f 「」でよりよい福祉サービス」、問13 e 「介護の仕組み充実」などの項目に大きな負荷を持った。第3因子は問13 i 「生きがいある高齢者が増える」、問13 j 「高齢者の発言力が増す」などの項目、第4因子は問13 m 「経済の活気が維持できない」、問13 o 「敬老精神が失われる」などの項目にそれぞれ大きな因子負荷を持った。プラス・イメージ項目は第2因子と第3因子に、マイナス・イメージ項目は第1因子と第4因子にそれぞれ分かれて属している。以上から、第1因子は「社会的弱者性への不安」の次元、第2因子は「高福祉・ふれあい社会イメージ」の次元、第3因子は「元気高齢者イメージ」の次元、第4因子は「高齢社会における社会不安」の次元と解釈された。累積寄与率は62.3%であり、14項目の全分散の62.3%が4つの因子によって説明

表8 「高齢社会イメージ」次元ごと・世代ごとの平均値¹⁾

		60歳以上	40-50歳代	20-30歳代
60歳以上 世代	全般的プラス・イメージ	3.16	3.24	3.21
		.83	.78	.71
	社会的弱者性への不安	4.11	4.07	3.95
		.82	.85	.78
	高齢社会における社会不安	3.63	3.43	3.34
40-50歳代 世代		.81	.82	.70
	全般的マイナス・イメージ	3.83	3.70	3.60
		.72	.75	.65
	高福祉・ふれあい社会イメージ	3.33	3.37	3.32
		.94	.86	.80
20-30歳代 世代	元気高齢者イメージ	2.89	3.03	3.05
		.90	.91	.83
	社会的弱者性への不安	4.04	3.98	3.88
		.76	.79	.74
	高福祉・ふれあい社会イメージ	3.33	3.37	3.32
		.94	.86	.80
	元気高齢者イメージ	2.89	3.03	3.05
		.90	.91	.83
	高齢社会における社会不安	3.56	3.34	3.24
		.85	.90	.75

(注)

1) 各次元に属する項目の評定値を足し合わせ、項目数で割った値(平均値)を上段に、その標準偏差を下段に示した。また参考として、他世代の因子構造にあわせて算出した平均値も掲示してある。

された。

次の段階として、所属因子ごとに項目の評定値の平均を算出して、その得点分布を検討した(表8)。各世代に該当した因子構造にもとづく平均値の値をゴシック体で表わしてあるので、そこに注目してみたい。平均値の最小値は3.03、最大値は4.11であり、いずれも中立点(「どちらともいえない」)の3.0を上まわった。特にマイナス・イメージについての次元で平均値が高い。マイナス・イメージ項目から2つの次元が抽出された60歳以上世代と20-30歳代世代をみると、「高齢社会における社会不安」次元よりも「社会的弱者性への不安」次元でより平均値が高い。

他方、プラス・イメージ項目から2つの次元が抽出された40-50歳代世代と20-30歳代世代をみると、「高福祉・ふれあい社会イメージ」次元でより平均値が高い。「元気高齢者イメージ」次元の平均値は40-50歳代世代で3.03、20-30歳代世代で3.05とほぼ中立点に等しく、高齢社会において元気に活躍する高齢者のイメージは中立的な評価をあたえられているといえる。「元気高齢者イメージ」次元に含まれる項目は、「高齢社会イメージ」のうち高齢者役割に関する項目であり、この次元が中立的な評価をうけたことは、老人観研究における「消極的な評価をうける活動性の側面」という知見と一致するところである。

以上から、老人観研究による「とりあげた次元によって評価に差異がある」という指摘は、「高齢社会イメージ」においても同様であるといつてさしつかえないだろう。

5 考察

以上の分析結果をふまえて、5節では「高齢社会イメージ」の各世代の特徴を描きだして論じてみたい。

最初に、本稿で検討した「高齢社会イメージ」においては、老人観についての諸研究でみられた「若年世代より中高年、中高年より高齢者の方が肯定的」といった線形の関連は確認されなかった。むしろその逆であって、マイナス・イメージ項目ないしマイナス・イメージ項目からなる各次元では、上の世代ほどマイナス・イメージが強かった(表1および表8を参照)。プラス・イメージ項目ならびにプラス・イメージ項目からなる各次元でも、60歳以上世代の平均評定がもつとも低く、40～50歳代世代と20～30歳代世代の平均評定が同程度であることから、60歳以上世代の高齢社会に対するネガティブなイメージが強固であることが理解される。

反対に20～30歳代世代は、相対的にポジティブな高齢社会イメージを抱いていた。この世代での特徴として、問13-1「 Γ 」の進展に高齢者が取り残される」の独自のポジションがあげられる。40～50歳代世代および60歳以上世代では、問13-1は「高齢社会における社会不安」次元に所属する項目との関連が強いが、20～30歳代世代では、問13-1は「社会的弱者性への不安」に所属する項目(問13-p、13-r)とより強く関連している。項目間相関係数の検討でもすでに指摘した点ではあるが、くりかえすと、問13-1の独自の位置づけからは、

若年世代が、情報技術(Γ)の進展に高齢者が取り残されることは、介護負担の増加や老後不安と同じように起こりうる具体的なできごとであると認識していることを読み取ることができ、情報技術をめぐるデジタル・デバイド論からみて興味深い点である。

さらに項目間相関係数の検討および主成分分析の結果からは、また異なった側面が観察できる。世代別に主成分分析を行なった結果、マイナス・イメージ項目が第1因子として前面にでてきたのは、60歳以上世代ではなく、40～50歳代世代であった。このことが意味するのは、上述したように、マイナス・イメージ諸項目間の相関が強く、あるマイナス・イメージに賛同する人は他のマイナス・イメージにも賛同しがちだということである。この世代では、プラス・イメージ諸項目間の相関も高かったことは5節で確認したが、これらのことは言い換えれば、40～50歳代世代では、悲観的な人とはことん悲観的な社会観を持ち、楽観的な人はますます楽観的な社会観を持つているという対象者の二極分化が、他世代と比較して顕著なのだとはいえる。

この中年世代の特徴を、全体の分布傾向から解説してみよう。全体の分布傾向の類似という観点からみると(図1を参照)、40～50歳代世代は、20～30歳代世代との間でより似た分布をしている。しかしながら、本文中で「高齢社会のソフト面」と呼んだプラス・イメージ項目(問13-a、13-d)と、本文中で「介護不安・老後不安」と呼んだマイナス・イメージ項目(問13-p、13-q)に注目すると、40～50歳代世代と60歳以上世代の分布が例外的に近似していることに

気づく。つまり、団塊の世代を含む40～50歳代世代は、20～30歳代世代と同程度に福祉・介護サービスの充実に期待をよせつつ、60歳以上世代と同じかそれ以上に高齢社会のソフト面の機能にも期待しているが、介護不安・老後不安は3世代中もっとも強いという特徴を持っている。家族介護機能がまだしも機能している高齢世代と、そのような機能にはもはや期待をよせられない若年世代との間にはさまれ、さらに自ら自身が日本の高齢化をピークへと推し進める世代である40～50歳代世代は、自分や親の高齢期にいかに対処するかという観点からみて、過渡期世代である。そのような世代のまさに当事者として、過渡期を新しい時代の到来とみるか（楽観的）、厳しい時代の到来とみるか（悲観的）の姿勢の差が、「高齢社会イメージ」の分布と意識構造に表われているのではなからうか。

このように、項目によって若年世代の意識に近くなったり、高齢世代の意識と似かよったりするという40～50歳代世代の浮動的位置は、堀による古い観の分析においてもみられた特徴であった。ここにみられる「高齢社会イメージ」の分布と意識構造は、若年世代から高齢世代にいたる、価値観・意識のある種の連続性、ないしは段階的な変化を想起させるものである。しかし、本稿では60歳以上世代、40～50歳代世代、20～30歳代世代と操作的に3つの世代を設定し、分析を進めてきたが、上記にみられる各「世代の」特徴は厳密な意味での世代（コーホート）効果であること確認されたわけではない。ある一時期の年齢層ごとの差異を示す統計データは、よく知られるように、世代（コーホート）効果、時代効果、加齢効果の複合

的産物であって、これらの分離・検証を行なうには長期的なパネル調査が必要となる（直井道子 1998）。

したがってここで、真に世代効果を特定することはできない。しかし、上述してきた解釈によつて、「高齢社会イメージ」とその意識構造を理解するならば、次のように言うことは内容上の妥当性を持つと考ええる。第一に、すべての世代にわたつて明らかな、マイナス・イメージ項目の平均値がプラス・イメージ項目の平均値よりも高いという事実からは、すべての世代の「高齢社会イメージ」をマインスの方向へうながす、「時代効果」を読み取ることができる。第二に、40～50歳代世代の過渡期的特徴は、まさにこの当該世代であるからこそ持ちうる特徴であつて、本稿での20～30歳代世代が40～50歳代にさしかかったときに同様の性質を示すとは考えにくい。したがって、この世代の特徴は「世代効果」であると考えるのが妥当であろう。ただし、高齢社会のソフト面や福祉・介護サービスへの期待、介護不安・老後不安が強く、悲観的な人はより悲観的という特徴とは別に、当該の時代における若年世代と高齢世代との中間的な意識分布を示すという特徴自体は、「世代効果」ではなくむしろ「加齢効果」ともいふべきものであろう。なお、高齢世代ほどネガティブな「高齢社会イメージ」を持っているとする知見については、古谷野らが仮説として提起したような価値意識の加齢効果である可能性、あるいは現在の高齢世代に特有の世代効果である可能性の両方が考えられる。先行研究の知見とは不一致であることもあり、いずれが適切かについては、判断を留保するのが妥当であろうと考え

る。

6 結語

本稿は、高齢社会というわが国の現状と、高齢化の今後の社会的影響について、人々がどのような意識を抱いているかという「高齢社会イメージ (aged society images)」を、「世代差」という観点から明らかにすることを目的に論を進めてきた。

まず世代ごとの特徴とは別に、「高齢社会イメージ」の分析についての知見をあげておくと、「高齢社会イメージ」においても、とりあげる次元により異なっており評価されることが確認された。特に「社会的弱者性への不安」因子に属する項目の評定平均値は非常に高かったが、「元気高齢者イメージ」因子ではおよそ3.0と中立点にほぼ等しかった。このことは、老人観研究において見いだされた、老人の「活動性」次元が消極的に評価されがちであるという知見と一致している。

次に、世代差についての知見を整理しておこう。「高齢社会イメージ」の平均値分布を世代ごとにみたところ、老人観等の先行研究の知見とは逆に、上の世代ほどマイナス・イメージが強いことが明らかにになった。なぜ上の世代ほどマイナス・イメージが強く、プラス・イメージが弱くなるのか、その理由は本稿では明らかにできなかったが、価値意識に関する加齢効果である可能性と世代効果である可能性とを留保した。他の価値意識との関連を検討するなど、今

後の分析課題である。ただし、すべての世代にわたってマイナス・イメージ項目の平均値が高いという事実からは、「時代効果」としてのマイナス・イメージの強さが示唆された。

さらに相関係数と主成分分析の結果へと進むと、40～50歳代世代の特徴がうかがえた。すなわち、40～50歳代世代では、プラス・イメージ諸項目間、マイナス・イメージ諸項目間それぞれの相関係数が高く、楽観的な人ほどより楽観的で、悲観的な人ほどより悲観的という傾向があった。この二極分化の傾向が他世代に比べて顕著である理由を、回答の平均値分布を再度解説することにより、本稿では、40～50歳代世代における「世代効果」としての過渡期的性格に論拠をもとめた。つまり、「団塊の世代」を含む40～50歳代世代が、自らをケアや扶養をめぐる過渡期世代の当事者として認識することの効果ではないかと推論した。

60歳以上の高齢世代では、問13 eや13 fといった介護・福祉サービスの充実への期待が相対的に低く、20～30歳代の若年世代では、それらへの期待が高いこと。また、高齢世代では問13 a～13 dといった、高齢社会のソフト面への期待が高い反面、若年世代ではそれらへの期待が低いこと。40～50歳代の中年世代では、この両世代の間にあって、介護・福祉サービスのソフト面にも期待をよせつつ、介護不安・老後不安はもつとも高いというその特徴は、高齢化の続く今後の日本の中で、とりわけ中年世代が、期待をよせる対象はあっても、それが安心をあたえてはくれないと感じていることを物語っているように思われる。

〔付記〕

本研究は平成13年度科学研究費基盤研究A(2)13301007「情報通信技術(T)・革命的・文化的・社会的・心理的效果に関する調査研究」(研究代表者：直井優)の研究成果の一部である。

〔注〕

- (1) たとえば、木村邦博(1998)は、社会のしくみに関する認知としての学歴社会イメージと、階層的地位としての学歴によって、社会に対する全般的な不公平感の説明を試みている。
- (2) この点については、岩下(1979, 1983)にくわしい。
- (3) 評定法に対する批判点に、とりあげる項目の網羅性あるいは代表性に何ら保証がないというものがあるが、この点についてはSD法も同様の批判をうけている(岩下1983)。この網羅性について、評定法・SD法ともに問題点を抱えている中では、両者には測定法としての優劣があるというよりも、調査目的に応じて使い分けられるべきものといえる。ただし、本稿で作成した「高齢社会イメージ」指標は、作成の最初の段階にあり、項目の信頼性や網羅性等について、今後改善の努力が必要であることはいうまでもない。
- (4) このクイズは高齢者や現在の社会状況、過去の高齢化の動向についての「知識」を問うものであって、現在も続いている高齢化に対する人々の意識をとらえるという視点には立っていない点に、本稿で扱う「高齢社会イメージ」との差異がある。ただし、高齢社会についての「知識」のどの側面に世代差がみられるかを明らかにできる点では、非常に有益な設問群である。
- (5) 岩淵・直井では、直井・吉川編(1995)、伊藤まゆ・田中重人(2001)もとりあげたが、前者には世代差についての記述はなく、

後者では年齢との相関係数は有意ではないという結果であった。ただし、後者は50歳代までを調査対象としており高齢者を含んでいないことに注意が必要である。

- (6) 「情報化調査」の概要および特徴については、直井優・菅野剛(2003)を参照されたい。

- (7) 本来問13は問13s、問13tを含む20項目からなるが、問13sと問13tは「若さという価値」についての項目であるため、ここでは分析に含めない。

- (8) 「情報化調査」で追加した項目は、経済企画庁による「国民生活選好度調査」や、高齢化社会について論じた高橋勇悦・高萩盾男(1996)や、老人イメージについて独自の視点からまとめた辻正二(2000)らの著作からヒントを得て作成されている。

- (9) 世代という用語は多義的であるが、大きくは①年齢コーホート、②家族内リネナッジ、③歴史社会的コーホートという3つの意味に整理できる(森岡清美・青井和夫編1987・1991)。本稿ではもっとも一般的な①の意味で用いている。

- (10) 単純構造の観点からみれば、必ずしも満足のいく結果とはいえないが、各世代の因子構造について内容上の妥当性の観点から判断してこれらの結果を採用した。

〔参考文献〕

- 青森県総合社会教育センター、2002、『現代的課題の学習に関する調査研究——高齢社会における高齢者教育に関する調査報告書』。
- 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明、1993、「中学生の老人観——老人観スケールによる測定」『社会老年学』38: 3-12。
- 堀薫夫、1996、「大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較」『大阪教育大学紀要第IV部門』44(2): 185-97。

- , 1998, 「中高年層の老いと死への意識の構造」『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』47(1): 153-64.
- 堀薫夫・大谷英子, 1995, 「高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究——『The Facts on Aging Quizを用いて』」『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』44(1): 1-12.
- 保坂久美子・袖井孝子, 1986, 「大学生の老人観」『老年社会科学』8: 103-16.
- , 1988, 「大学生の老人イメージ——SD法による分析」『社会老年学』27: 22-33.
- 伊藤まゆ・田中重人, 2001, 「意識の中の高齢社会」川端亮・田中重人編『吹田市民のコミュニティ・ネットワークに関する調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座先進経験社会学研究分野: 124-32.
- 岩淵亜希子・直井優, 2003 (近刊), 「社会観としての『高齢社会イメージ』とその特徴」『大阪大学人間科学部紀要』29.
- 岩下豊彦, 1979, 『オスグッドの意味論とSD法』川島書店
- , 1983, 『SD法によるイメージの測定——その理解と実施の手引』川島書店
- 経済企画庁国民生活局編, 1999, 『平成10年度国民生活選好度調査 生活のなかのゆとりと安心——老後、住宅、子ども』大蔵省印刷局
- , 2000, 『国民の意識とニーズ 平成11年度国民生活選好度調査』大蔵省印刷局
- 木村邦博, 1998, 「教育、学歴社会イメージと不公平感」『理論と方法』13(1): 107-26.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2002, 『日本の将来推計人口 (平成14年1月推計) 平成13 (2001) 年～平成62 (2050) 年』厚生統計協会
- 古谷野巨, 1990, 「通年講義による老人観の変容——専門科目『老人福祉論』の場合」『桃山学院大学社会学論集』23(2): 1-19.
- 古谷野巨・児玉好信・安藤孝敏・浅川達人, 1997, 「中高年の老人イメージ——SD法による測定」『老年社会科学』18(2): 147-52.
- 森岡清美・青井和夫編, 1987・1991, 『現代日本人のライフコース』日本学術振興会
- 中野いづ子, 1991, 「児童の老人イメージ——SD法による測定と要因分析」『社会老年学』34: 23-36.
- 中谷陽明, 1991, 「児童の老人観——老人観スケールによる測定と要因分析」『社会老年学』34: 13-22.
- 直井優・吉川徹編, 1995, 『経験社会学・社会調査法叢書Ⅳ 家族と高齢化社会——学術用モニター・システムの開発』大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法講座
- 直井優・菅野剛, 2003 (近刊), 「情報化社会に関する全国調査」(JIS2001)の概要』『大阪大学人間科学部紀要』29.
- 直井道子, 1998, 「高齢者と家族生活の多様性——世代差と加齢変化に焦点を当てる」『季刊家計経済研究』39: 23-9.
- 小田利勝, 1992, 「高齢化問題に関する事実認識と高齢に対する態度——高齢化社会クイズ作成の試みと解答の分析」『徳島大学社会科学研究』6: 141-70.
- , 1994, 「高齢化社会に関する人々の事実認識——『高齢化社会クイズ』第3版の分析」『徳島大学社会科学研究』7: 237-62.
- 総務庁統計局編, 2000, 『平成7年国勢調査編集・解説シリーズNo.9 高齢人口と高齢者のいる世帯』日本統計協会
- 高橋勇悦・高萩盾男編, 1996, 『高齢化とボランティア社会』弘文堂
- 辻正二, 2000, 「高齢者ラベリングの社会学——老人差別の調査研究」恒星社厚生閣

The Structures of Aged Society Images and the Generational Differences: Analysis of the Data from The Japan Survey on Information Society (JIS) 2001

IWABUCHI Akiko, NAOI Atsushi

This article analyzes generational differences in "Aged Society Images." Aged society images are how people think about our aging society and the influences of aging. Existing research on this topic is unable to examine generational differences because it generally lacks a cross-generational perspective. Nor does existing research have a way to measure how people think about their society in relation to aging. Using data from The Japan Survey on Information Society (JIS) 2001 (1500 respondents ranging in age from 20 to 89 years ; response rate: 67.4%), we analyze aged society images and compare three generations, age 60 and over, age 40 to 59, and age 20 to 39.

The results are as follows. First, the average scores of most items about aged society images are over the neutral point (3.0), so all three generations give approval to positive images. But the average scores for negative images grow higher with age. Positive images are stronger among younger people. The oldest generation had the strongest negative images, and the middle and the youngest generations had more positive images than the oldest generation. Finally, the middle generation members who had some negative images tended to have other negative images as well. We think that this tendency in the middle generation toward bipolarization of perspectives on their society results from the transitional characteristics of generational relationships in Japan. The middle generation containing baby-boomers is aging at the same time that it is facing the burden of giving care to the older generation and the difficulties of managing their later lives by themselves. Thus, many in this generation hold doubts about the future of the aging society.

Key Words

aged society images, perspective on our society, generational differences, structure of images,
The Japan Survey on Information Society (JIS)